

派生的刺激関係の成立に関する実験的検討

—大学生を対象とした関係訓練の効果の比較—

The effects of relational training on establishing the derived stimulus relations

○大月 友*・木下奈緒子**・上村 碧***・茶原仁美***・藤屋雅子***・武藤 崇***

(*早稲田大学人間科学学術院・**同志社大学大学院・***早稲田大学人間科学部・****同志社大学)

Tomu Ohtsuki*, Naoko Kishita**, Midori Uemura*, Hitomi Chahara*, Masako Fujiya*, & Takashi Muto**
(*Waseda University, **Doshisha University)

keywords: Relational Frame Theory, derived stimulus relations, derived relational responding

【問題と目的】

人間の言語や認知に対する現代の行動分析的説明を提供するため、関係フレーム理論(RFT)が提唱されている(Hayes et al., 2001)。RFTでは、人間の言語や認知の中核的な特徴として、複数の刺激を恣意的に関係づける能力を指摘しており、派生的刺激関係の成立に注目している。そして、派生的刺激関係の成立に必要な変数を実験的に検討し、訓練中に同類や反対といった刺激関係を表す刺激が含まれることの重要性を指摘している(Cullinan et al., 2001)。

このような知見をうけ、RFT研究では刺激関係の成立を目的とした訓練が用いられているが、訓練のタイプは2つに大別される。両タイプとも訓練において、刺激関係を示す刺激、関係づけられる2つの刺激が訓練中に提示されるが、刺激の用いられ方が異なる。1つ目は関係訓練と呼ばれ、刺激関係を示す刺激を文脈手がかり、関係づけられる2つの刺激のうちの一方を見本刺激、もう一方を比較刺激に含めるタイプである。2つ目はREP(Relational Evaluation Procedure)と呼ばれ、関係づけられる2つの刺激を見本刺激、刺激関係を示す刺激を反応選択肢としたタイプである。両タイプとも、派生的刺激関係を成立させることは示されているものの、その効果の違いについて検討した研究はこれまでにない。

そこで本研究は、2つの訓練のタイプが派生的刺激関係の成立に及ぼす効果を検討することとする。

【方法】

参加者: RFTや刺激等価性に関する知識のない、大学生・大学院生26名が実験に参加した。参加者は関係訓練群(13名)、REP群(13名)に群分けされた。

装置: 実験課題はすべてPsyScope(Cohen et al., 1993)を用いて作成し、Apple社製PCで実施した。刺激: 刺激関係を示す刺激として“同類”と“反対”という単語を、関係づけられる刺激はアルファベット3文字の無意味つづりとした(CUGなど)。

手続き: すべての参加者に対して、まず実験に関するインフォームド・コンセントを行った。そして、関係訓練群には関係訓練とテスト、REP群にはREPとテストをそれぞれ実施した。

① 関係訓練・テスト: 関係訓練の各試行では、画面上部に刺激関係を示す2種類の単語のうち1つを、画面中央に見本刺激を、画面下部に3つの見本刺激を呈示した。参加者は、画面上部と中央に呈示された2つの刺激を見て、比較刺激の中の1つを選ぶよう求められた。4種類の試行タイプが用意され、1ブロックでは各試行タイプを4施行ずつ合計16試行訓練が実施された。1ブロック内で14試行以上正反応を示した場合、派生的刺激関係のテストが実施された。テストでは、訓練された4つの刺激関係に基づく8種類の派生

的刺激関係がテストされた。テストは各刺激関係を2試行ずつ合計16試行実施し、14試行以上の正反応で課題は終了とされた。14試行未満の正反応であった場合は、再び訓練に戻り訓練とテストが繰り返された。

② REP・テスト: REPの各試行では、画面の上部と中央に見本刺激を、画面の下部の左右に反応選択肢として刺激関係を示す2種類の単語を呈示した。参加者は、見本刺激のセットを見て、2つの反応選択肢のどちらかを選ぶよう求められた。テストでは、訓練された4つの刺激関係に基づく8種類の派生的刺激関係がテストされた。訓練およびテストの試行数、達成基準は関係訓練群と同様であった。

【結果と考察】

Table1に関係訓練群とREP群における、派生的刺激関係のテストを達成したものの人数、および、達成までに要した訓練時の試行数を示す。群による達成者数に差があるか検討するため、Fisherの検定を行った。その結果、群による有意な差は確認されなかった。また、群による派生的刺激関係の成立までに要する訓練試行数に差があるか検討するため、 t 検定を実施した。その結果、両群に有意な差は認められなかった($t(22) = .11, n.s.$)。これらの結果から、2つの訓練タイプが派生的刺激関係の成立に及ぼす効果には、有意な違いは認められないことが明らかにされた。

本研究の結果から、刺激関係を示す刺激を文脈手がかりとして用いても、反応選択肢として用いても、派生的刺激関係が成立し、訓練試行の中に含まれることが重要であることが示唆される。しかしながら、本研究は先行研究同様、すでに派生的関係反応が確立している者を対象としていることから、言語行動が未発達な児童などを対象とした場合、どちらの訓練タイプが有効であるかどうかは明らかにされていない。今後、更なる検討が必要であると考えられる。

Table 1 各群の訓練結果

	N	達成者数	達成までの試行数
RT群	13	11	112.00(63.20)
REP群	13	13	109.53(45.18)

【引用文献】

- Cullinan, V. A., Barnes-Holmes, D., & Smeets, P. M. (2000). A precursor to the relational evaluation procedure: Analyzing stimulus equivalence II. *The Psychological Record*, 50, 467-492.
- Hayes, S. C., Barnes-Holmes, D., & Roche, B. (2001). *Relational Frame Theory*. New York: Plenum Press.